

揖斐川町学校教育の在り方審議会・谷汲地区集会（議事録概要）

1 日 時 令和7年11月28日（金） <開会>19時00分 <閉会>20時30分

2 場 所 谷汲文化会館・大会議室

3 出席者

審議会委員 秋山 晶則、棄原 利樹

事務局 教育長 香田 静夫、事務局長 所 貴宏、学校教育課長 富山 哲成

地域住民 20人

4 次第

（1）開会挨拶

- 秋山委員長より、開会の挨拶を行う。

（2）概況説明

住民：説明の前にお聞きしたい。様々な意見を聞きたいということであり、地域の大人から子どもまでどなたでも参加できる会だとされているが、私はたまたまご存じの方からお話を聞いたので今回参加できているものの、私の手元にはこの会が何時からどこで行われるという資料がなかった。他にも知らない方がたくさんいて、そういう方は意見を言うことができない。また、子どもも参加できる会とのことだが、この場に子どもは来ていない。子どもに通知は届いているのか。こうした状況になっている理由を教えていただきたい。

事務局長：全戸配布となる広報誌の11月号に、広報誌と別刷りで、両面刷りの1枚の案内を入れさせていただいている。本日配布しているシンポジウムの案内は片面刷りのものだが、その裏面に地区集会のご案内を印刷したものを配布した。また、学校を通じた案内もしており、決して案内していないというわけではないため、ご理解いただきたい。

住民：あの案内を配布しただけで周知したとするのは難しいのではないか。私も実際に忘れていて、たまたま手帳に書いていたものの、どういったものかわからず周囲と話をし、思い出したという具合だった。もう少ししっかりとPRをした方がよかったです。

住民：それでは、子どもにもこの案内を配布したということか。

事務局長：子ども自身にこの案内文を配布したわけではなく、スマート連絡帳というものを使って保護者の方に案内をさせていただいている。

住民：それで子どもは知っているのか。

事務局長：保護者を通じてご存じだと考えている。

住民：それでは、確実に子どもは知っているのか。知っているかたずねたら、「知っているが今日は勉強が忙しいため参加しない」というような答えが返ってくる状態になっているのか。

教育長：大変申し訳ないが、すべての子どもが今日ここでこの会があるということを知っているかどうかは把握していない。ただ、できる限りの方法で周知はしたもの、ご指摘のとおりお集まりいただけた方が限られていたという点は反省すべきことだと感じている。これから開催されるシンポジウムも含めて、今後は周知の方法を皆様のご協力を得ながら検討したいと考えているため、何卒ご容赦いただきたい。

住民：谷汲地区でこういった会を開かれるのは、今日で終わりではないのか。

教育長：今日がこの地区で初めての集会であり、何回行うということは言えないが、これからできる限り地域の皆様と声をかけ合えるような会を設けたいと思っている。

住 民：私もこの内容であれば子どももっと参加してもよいのではないかと思っているが、今日のこの時間では夕食の時間等と重なっていて来ることができないのではないか。12月13日のシンポジウムについては、学校等にも連絡して、子どもにも参加してほしいと案内してもらえるとよい。何よりの当事者は子ども本人であり、「自分が行く学校がこうなってほしい」という声は子どもたち本人からも聴けるとよいのではないかと思っている。まだ少し期間があるので、可能であればお願ひしたい。

教育長：おっしゃるとおりで、審議会の委員にも中学生や高校生が入ってくれており、大人と混じって協議をしていただいている。また、11月に行ったアンケート調査では、町内の学校に在籍されているすべての4年生以上の小学生と中学生に意見を聴いている。また、来月には中学生と「町長が語る会」というものも開催するが、その中でも教育に関心をもつ子どもたちが、私や教育委員会の者と意見交換をする場を設けている。ご指摘のように、幅広く努めていきたい。

住 民：ぜひ、小学校1年生から聴くようにお願いしたい。

教育長：今後検討させていただく。

- ・ 教育長より、「揖斐川町における学校教育の現状と課題」について説明を行う。

(3) 意見聴取

住 民：最初に、忘れてはいけない視点として、少子化は学校教育の責任ではないため、統合とは別物としてこれから揖斐川町の教育を考えるべきである、ということが言いたい。今は35人学級で編制しているということを言われたが、そこにとらわれる必要はない。例えば欧米先進国などでは初等教育において1学級20人ほどだと思うが、ちょうど今の揖斐川町の小学校は10～20人ほどの学級が多いので、もっと国から教育予算を出してもらうようにしながら、例えばそうした20人の規模でどういう教育ができるかということを考える必要があると思っている。また、アンケートを行っているということだが、子どもは自分が本当に思っている意見をなかなか言うことができない。そのため、中学生の声を聴くと言っても、その時に中学生が本当に自分の思いを言えているのか考えた場合に、私は疑問が残る。高校生くらいになると少しそうした意見が言えるようになるが、それでも聴くことは難しく、私も苦労しているところである。こうしたことは議論の前提になると思われるが、そのうえで意見を申し上げると、私は統合に反対である。谷汲が好きでここに残っているので、谷汲から学校を取り上げないでくれ、と声を大にして言いたい。ただ、先日小学校の共同作業の際に保護者の方に、統合に賛成である、大きい規模の学校がよいと言われた。一人のご意見は、「好き好んでこんなところにいるわけではないので、もう少し大きいよい学校にしてくれ」と言いたいのだろう、と受け止めた。もう一人のご意見は、「部活動ができなくなる、今ももうできていない」というものだったが、部活動は親が子どもの放課後の時間の責任を学校にすべて押しつけているようなものであり、本来子どもの世話をするのは親の責任である。私は教師として勤めていたこともあり、「教師が限度を超えた労働をすることで成り立ってきた今の教育は考え直す必要がある。部活動は親が他の地域まで送迎するか、今町が進めている地域のスポーツクラブとの連携の中で取り組めばよいことであり、部活動は統合に賛成する理由にならない」と伝えたら、その方は黙

っていた。ただ、そうした意見を聴いて、中学校は少しづつ大人になっていく段階であり、その時に小規模校でよいのかということで、考えが変わり始めている。一方で、「少数だからこそよい教育」というものは絶対的にあって、例えば先日の谷中フェスティバルでは、出席している子どもたちはほぼ全員が何かに取り組んでいた。その中でも、例えばバンドを生徒と先生たちが一緒に組んでいたが、バンドは少人数でできてチームワークの養成になる活動であり、そうしたところで社会性を育むこともできると感じていた。もう一点、小学校に関しては、揖斐川町は脛永公民館以外の公民館が小学校と一体化しているため公民館活動が活発で、子どもも公民館で育っている部分があると考えており、特にそれが顕著な小島地区は人口の減りも少ないように感じられる。そのため、本当は小学校を少なくとも公民館単位では残してほしいが、子どもの出生数を考えると難しいと思うので、教育行政には統合を考える前に公民館に子どもたちが気楽に行くことができる環境づくりをしていただきたい。先日北方公民館の方から、今は遠方から小学校に通う子どもたちがいるため、公民館と小学校が一体となって動くことが難しくなり、混乱しているということをお聞きした。そのあたりのことを教育行政がしっかりとスムーズに進むようにしてもらえると、この後の学校の教育を考えるやり方も進められるのではないか。子どもたちの人数を見ると、学校統合に反対と言えない時代が来るとは思うが、それを進めなければいけなくなる時代までに、社会教育の根幹のシステムをうまく回るようにしてほしいと強く願う。

住 民：この地域で生まれ育った者として考えると、学校が存在する意義としては確かに子どもたちの教育のためという側面があり、学校の中で集団活動をする中で得るものもあれば、行うべき活動や学業もあると思う。だが、もう一つ大事なものとして、「持続可能な社会を構築するインフラ」という面がある。これまでの町村合併や統合、さらには急激な過疎化によって地域がどんどん疲弊している中で、さらに統合が進むと疲弊がより加速し、地域のコミュニティが希薄化してしまうのではないかということを心配している。こうした「持続可能な社会を構築するインフラ」という学校の意義がまだとても大きいということを思うと、今ある学校を存続させることの重要性がみえてくるのではないか。まず、これまでの谷汲村ができた時の合併から平成の町村合併、さらにその後の学校統合に至るまで、非常に閉鎖的な形で行われたが、今回こうした意見交流の場をつくっていただけていることはありがたいし、できる限り何度も機会をつくっていただきたいと思う。ただ、「統合ありきではない」とおっしゃったが、今日の説明では小規模校を維持することによるメリットやデメリットについても話があったものの、先日私の元に届いたアンケートに添付された資料にはなかつたため、まさに統合ありきの資料だというように受け止めていた。私もここで生まれ育った者として、学校を残してほしいということを今は強く思うところである。2015年に改正された「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」にも、地域コミュニティの核としての小規模校を残す市町村の選択が尊重される必要性について明記されているように、規模が小さくなつたからといって統合に結びつけることが必ずしもよいとは限らない。どうすることがよいのかはわからないが、そうしたことが国の手引きに示されているということを大いに尊重し、検討材料にしていただくとともに、今日のこの場でこの会が終わらないよう、ぜひボトムアップの精神でもって意見を抽出していただきたい。最後に、アンケートの集計・分析について、どのようにこれから審議会へ提示されるのかという計画を教えていただきたい。また、年齢層によ

って意見は当然違ってくると思うが、単純集計だけではなく年齢層別の有意差なども統計処理していただきたいと考える。

事務局長：アンケートについては現在集計と分析を進めており、2月頃を目処にまとめたいと考えている。その集計方法については今後審議会でも検討することになるため、今すぐには詳しいことをお答えできない。

住 民：アンケートについて、抽出で行われたということだが、その場合私のように言いたいことがあっても言えない人が出てくる。そういったやり方をされていることに対し、それでよいのかと感じている。私は住民として、学校がなくなることは、谷汲に地域の拠点がなくなるということだと思っている。そして、それは「谷汲」という地域がなくなり、地図上にただ地名が書かれているだけのものになるということだと考えている。このように考えると、学校がなくなてもよいのか、谷汲の地域がなくなつてもよいのかということについて、谷汲に住む住民の方は皆何らかの思いがあるのではないか。そうであれば、やはりこの問題は、住民全員の意見を聴いてそれを元に進めるべきだと考える。手続きのことを考えて省略されているのであれば、それは方法としては速やかかもしれないが、それで谷汲が今後ますますよくなるとはとても思えない。アンケートを行うならば、子どものいないひとり暮らしのお年寄りの人の思いでさえも拾い出せるように、全員の意見を集めたうえで組み立てをしていただけないか。

住 民：私も子どもがいる親である。資料だけでは統合ありきではないということがわからなかつたのでご説明いただけてよかったですと思っているが、まず伺いたいこととして、それならばこれまでに検討されていることはどのようなものかについてお聞きしたい。

委員長：7月に審議会がスタートして、現時点では2回開催しており、シンポジウムが第3回となる。もちろん委員の中には様々な考え方があるが、どういう形態を目指すかという議論はまだまったく行っていない。そうした中で、シンポジウムでは実践をされているいくつかの事例について報告をいただく形になるが、この学校の問題はデリケートなものであり、地域のコミュニティに大きく関わっている問題である。本日も皆様からそうした認識を伺っており、それを踏まえながらも、その一方で今後の揖斐川町の子どもたちの学びというものについても、質的な面も含めて議論をしなければいけないものである。考えなければいけない要素が非常に多くある、ジレンマ問題であると申し上げてもよいかもしれないと考えている。そのため、先ほどからお聴きしている住民の皆様の思いをどういう形で反映させることができるか、ということをこれから議論していき来年度答申を行うため、今の時点ではどういったプランがあるかについては申し上げることはできない、という状況である。

住 民：「いくつかの事例」とおっしゃったが、他の所ではどういった事例があるのかということ自体我々はわかっていない。様々な事例について共有したうえで考える方がよいのではないかと思うが、どういった事例があるのか。

委員長：それが、本日配布しているシンポジウムの案内で挙げているものである。ここで挙げられている海津市は統合に向かったというパターン、岐阜市は義務教育学校という小学校と中学校を組み合わせた9年間の学びの拠点をつくったというパターンであり、もちろんこれだけではなく統合をしないという道を実践されているところもある。そういうものを我々も学びつつ、やはり地域に住まれている方たちのお考えも踏まえながら、ただし様々なことを自由にできるわけではなく、よりよい選択を探っていくしかないため、その一環としてこのような形で直接お伺いしているという状況である。

住 民：では、シンポジウムで挙げられているものは、どちらも統合するという方向性の事例のみだということか。

委員長：地域の水平的な統合をしたものと、垂直に統合したものということで、異なるパターンのものである。今回は海津市と岐阜市の事例を挙げているが、それぞれ何を悩んだのかということも我々に共有していただき、選択肢がいくつがある中でどういう方向を探るか、ということについて参加してくださった方々と議論したいと考えている。それまでにもう少し整理し、どういう選択肢があるのかということについてもこの場で共有できればよいというように考えている。

住 民：過去2回の審議会で、この2件以外に調べた事例にはどういったものがあるか。

委員長：審議会ではまだそこまで議論していない。今回は県内の現在進行形で取り組まれている自治体について、この数年で検討されたうえでそうした方針で進まれているということで、まずはその話を聞いてみるとということで選択されたものである。

住 民：1点目に、まずはどういった形式があるのかということを知らないと議論できないと思っているので、このシンポジウムもその一つだと思うが、県内外問わずそうした様々な事例を住民に共有する機会が多くあるとよい。2点目に、私の子どもは今小学校に通っているが、少人数であることが逆によいと思っている。よい点として、丁寧に見てもらえているという感覚があることやふるさと学習に力をいれてくださっていること、他の自治体ではなかなかないであろうホームステイなどがあることに加え、子ども関係の制度も非常に充実していることもあるので、むしろ少人数であること自体がよい面もありうるのではないかと思っている。また、複式学級についても、実は違う学年の授業と一緒に見られるのは楽しいのではないか、子どもの可能性を広げることもあり得るのではないか、と思ったことがある。実際に将来的には統合しなければならないという局面はあるかもしれないし、今はバス通学であり長瀬小学校があれば歩いていけるのでよかったですと思うこともあるが、こうした小規模のよさというものを高められるパターンはないか、ということを検討していただきたい。3点目に、子どもの移動の自由を考えていきたい。歩いていけるところに学校があればその中のコミュニティで子どもは遊べるが、バス通学の場合は自宅前のバス停でしか降りることができず、友達の家に行く場合は一度家に帰ってから送迎する必要があるため、そのことが遊ぶ約束のハードルになっている。例えば下校時だけでも、降りる場所の記録を取って途中で降車可能にすることはできないだろうか。関連して、今は個人情報保護の関係で昔の連絡網のような電話番号の一覧がないため、友達の家がわからぬ時に親同士で連絡をとることができない。そこで、例えばクラスで親のLINEグループをつくるなど、親同士が連携を取ることができ、かつ子どもも移動が自由にできる状態をつくることを目指してほしい。特に統合してバス通学の距離が伸びるのであれば、そういうことを考えていただきたいと思っている。4点目は、地域の高齢者の方は非常によくしてくださるので、そういう地域の方と子どもたちがたくさんの交流をできれば、「学びの質」というところも担保できるのではないか。何も子どもだけが多くなければいけないわけではなく、子どものうちに様々な大人と接してどのように過ごしているかを見ることもよい学びだと思うので、そのように学校を地域に開いていくという方向性も検討していただきたい。

住 民：統合することとしないことの、それぞれのメリットとデメリットがまったくわからず判断がつかないので、こうした事例を知りたい。谷汲は、子どもは少ないと思うが、

落ち着いた生活をしていると感じており、それは少人数で先生がしっかりとみてくださっているからではないか。私は今のこの人数の学校に不満はないが、大規模校では社会性を育めるとは聞くもののよさがわからないため、そういうことをもう少し知ることができるとよい。

住 民：私も生まれてからずっと谷汲で暮らしているが、谷汲小学校は少人数で温かい環境であり、校舎も素敵で、子どもたちは温もりを感じながら、地域の人と関わってすぐすぐと心豊かに育っており、それはとてもよいことだと感じている。だが、例えば今の中学校3年生は10人で1クラスであり、仲良しではあるが、幼稚園から谷汲中学校まですずっと同じ友達と過ごすので、その中で学力や運動能力などについて自分でレッテルを貼ってしまって、子どもたちが自分を出し切れていないところがある。また、私の子どもが中学校1年生の時にクラスに転校生が来たが、結局クラスに馴染めず、家の中ではよく話をする子だったようだが、学校では卒業するまで一言も話ができなかった。ただ、大垣市の高校に入学してからは人が変わったようになって、私の子どもも話ができるようになったということだった。そのことから、子どもに何も問題意識がなければよいが、いじめにあったり過ごしづらさを感じたりしている子が一人でもいるのであれば、大勢であれば逃げ道もあるし、違った環境もあるのではないかと思う。例えば瑞穂市では、いじめがあった場合などはどの小学校にも通うことができるようになると聞いている。過ごしづらさを感じると不登校などにもつながるし、やはり学校が楽しくて全員で学び合えるというところが教育の一番の原点だと思うので、温かい気持ちで育つことも大事かもしれないが、大勢の中で切磋琢磨しながら、子どもがもっと自分を見つけられるような環境を与えていくことも大事なのではないかと感じている。

住 民：今日、皆様のご意見を聞きながら、春日中学校が統合した時にみた、地域に誇りをもつ子どもたちと、それを温かく見守っていた春日地域の皆様の感動的な姿を思い出していた。我々の愛する地域に学校がなくなる寂しさに関するご意見がたくさん出ていたが、それを踏まえてどのような方向性にしていくか、というところが基本的な審議の中心になると思われる。そこで、審議会には、いつ頃にどのような方向性を見出しか、という想定をある程度もっていただきたい。3年前に学校統合について教育委員会で勉強した時には、池田町や大野町もまだ動き始める段階だったが、この3年で池田町は2小1中、大野町は1小1中という一つの目処を立てている。非常に迅速な動きで、すべての住民の意見をすべて集約したものなのかなはわからないが、いつまでも意見聴取ばかりしていてはならないと考える。また、この問題は住民の関心が高いものであり、町議会議員の方も今日は多く来ている。そのため、どうか審議会で行われる様々な審議の経過をぜひしっかりと公開していただきたい。次に、子どもたちの意見の聴取について、かつては子ども教育委員会や中学生教育委員会なども行われていたが、やはり子どもたちはこういう場に来てもなかなか意見を言いにくいだろうと思う。町長と語る会もよいとは思うがそうではない場面で、今の小学生や中学生がどうしたらよいと思っているか、意見を丁寧に聴取していただきたい。最後に、やはり現実に少子化が進むことは間違いないので、審議会のこれから出口やプロセスを住民に示しながら、住民とともに歩んでいただきたい。大変難しい内容だと思うが、どうかこういった会について丁寧に検証しながら審議し、住民へしっかりと説明をしながら進めいただきたいと思っている。

住 民：私も子どもがいる保護者であり、今までに何人かの保護者にこの場のことについて声をかけたものの、やはりこの時間帯は外出しにくいとのことであまり来ていただけなかった。スマート連絡帳で何度か案内は来ていたため、小学校・中学校の保護者は見逃していない限り知っているのではないかと思うが、やはり時間帯の関係で来られなかつた方も多くいらっしゃるのではないかと思う。今日来られなかつた方々から様々なご意見を聞いてきてるので、お伝えする。「なかなかそういった集会に参加するのは難しいので、スマホなどすぐに自由に意見を言えるような環境をつくって、ぜひとも様々な意見を伝えられるようにしてほしい」というご意見や、「多くの人たちの中で学んで揉まれた方が子どもたちにもよいのではないか」というご意見もあれば「今の谷汲地区の規模で義務教育学校とすることはできないか」というご意見もあった。また、「揖斐川町は特別支援学級や通級指導教室といった面ですごく充実しているが、それは少人数だからこそそういった子どもたちを見てもらえるからではないか。そのことを考えると、そういった子どもたちを見逃さないためには小規模の学校も必要なのではないか」という意見もあった。ここからは私の意見だが、資料2ページには「1学年2クラス以上あることが望ましい」という国の手引きの言葉が書かれている。このことと出生数から考えると学校を一つにした方がよいようにも思えるが、そういう数字にならないようにどうしたらよいか、ということを教育面から考えられないか。例えば揖斐川町全体で1校になった場合にふるさと学習がどういったものになるのかわからないし、これまでに学校が統合された地区の現在の児童生徒数は何人なのか、子どもがいる保護者は統合されて小学校がなくなった地区に移住しようとは考えないのでないか、という思いがある。学校の配置から教育の在り方を考えるならば、例えば義務教育学校という形態もある。また、先ほどのご意見にあった瑞穂市では、恐らく学区外からでも少人数の学校に通うことができる小規模特認校という制度を使っていると思われる。こうした仕組みなどを使って小規模校も維持し、比較的大きな規模の学校と様々な面できめ細かな学びができる学校とで選べるような教育にしないといけないのではないか、と考えている。統合ありきではないということで、地元のことが大事という考え方もあるものの、最終的にはこれから子どもたちやここで子育てをしようと考えている若い人たちのことも考えながら意見聴取ができるといいので、最初にお伝えしたような意見を出すことができる様々な仕組みについても考えていただきたい。

住 民：私も3人子どもがいて、そのうちの1人は小学校に通っている。まず、資料の図表2を見て、意外と谷汲には子どもがいるのだと思ったが、確かにこれから子どもは少なくなっていくので、統合も考えなければいけないだろうと思う。私の経験を話すと、私自身も子どもの時に当時の横蔵小学校に転校してきたが、同級生は3人で、複式学級だった。ただ、転校前は大規模校だったため、先生がこんなに細かく教えてくれるのか、ということを身に染みて感じていた。その後横蔵小学校が谷汲小学校に統合されバス通学になったが、その経験から、小学校が変わっても子どもたちは対応できると考える。親はいじめや勉強面などで心配になるが、同級生が多くなっても友達や先生とのやり取りの中で成長していくので、統合しても子どもとしては特に問題ないのではないかと思っている。私も谷汲小学校・谷汲中学校で育ってきたため、個人的には残してもらいたい気持ちはあるが、致し方ないだろうと感じている。次に、もし統合する場合のスクールバスについて、どのあたりに学校ができるかはわからないが、

私の子どもはまずバス通学になると思われる。今もバス通学をしていて、まだ朝は比較的余裕があるが、長瀬では朝6～7時にバスが出るところもあると聞いており、子どもたちの朝の準備を考えると、場合によっては親の負担が非常に大きくなることが考えられる。そのため、そういうバスの運行時刻や小学校の始業時間と終業時間についても考える必要がある。最後に、私の子どもは登校時に私の母親と地域の方にバス停まで送っていただいているが、その地域の方から今の子どもたちは昔の子に比べて基本的な運動動作が下手になったのではないか、という話をされた。そのことから、子どもが少ないと運動能力が落ちたり、遊び方がわからないまま大きくなつたりということがあるのではないか、子どもが多ければ多いほど子どもの学び方も変わってくるのではないか、と感じた。

（4）閉会挨拶

- ・ 萩原委員より、閉会の挨拶を行う。

以上、閉会

[補足]

地区集会終了後、書面にて1件の意見の提出があった。

- ・児童生徒数ばかり注目するのではなく、子どもが遊べる機会を確保してほしい。学校において、学力はどのような形でも身につけられると思うので、遊びを通じて学びを得る機会の確保に配慮していただきたい。